

著書、論文の類などを含めて自己紹介をしておいたらと
勧められましたので、以下の様に紹介させていただきます。

平成3年10月25日 吉岡 俊輔

- * 昭和43年4月から千葉県柏市にある気象大学校に勤務いたして
しております。
- * 昭和58年にISLAMIC CENTER-JAPANを初めて訪ね、以来貴セ
ンターのお世話になっております。
- * 昭和58年12月23日、ムスリムとして受け入れて頂きました。
(cf. No.219 Date June 15 '84 ムスリム名はアーダム)
- * [著書] 共著者として下記の二冊に僅かながら協力をいた
しました。
 哲学者とその思想 : 共同出版社 : 昭和55年3月
 哲学小辞典 : 共同出版社 : 昭和49年10月
他に、論文集、現代イスラームの総合研究 : アジア経済
研究所 : 昭和45年8月 に拙論文を収めさせて頂きました。
- * [論文] イスラームに関する研究論文としては、
 クルアーンに見出される<創造>概念の特色
 ・・・創造の反覆を中心として・・・
 雑誌(哲学)第37集:昭和60年10月
 及び第39集:昭和62年10月
等があります。
- * [学会] イスラームに関する研究発表としては、
 イスラームの自然観 : 広島哲学会 : 昭和47年11月
等があります。
- * [ISLAMIC CENTER-JAPAN] 昭和58年以來参加させて頂い
ているクルアーン月例研究会は非常に楽しく有意義であり
ます。私が普段一人で勉強している事を研究発表という形
で喋らして頂き、それについて貴重なご意見を拝聴させて
頂ける訳で、とても感謝いたしております。

以上です。今後ともよろしくお願い申し上げます。

[イスラーム思想と日本]

平成3年11月9日 イスラミック センター ジャパン 吉岡俊輔

[ISLAMIC THOUGHT AND JAPAN]

11. 9. 1991 ISLAMIC CENTER-JAPAN SHUNSUKE YOSHIOKA

[I] はじめに
Before the speech

- ① 御挨拶
A word of salutation
- ② 25年間の教員生活からの感想
An impression during 25 long years as an Islam teacher
in Japan
- ③ 宗教に関する統計の語るもの
Statistics shows.....

[II] 日本人の宗教的感情
A Japanese religious sentiment

- ① 既に日本人は独特の宗教的感情を持っている。
An almost innate religious sentiment unique and strong
of Japanese

- ② 日本人の思考傾向
A predisposition of Japanese way of thinking

[Ⅲ] イスラームと日本人の宗教的感情
Islam and the Japanese religious sentiment

[Ⅳ] イスラームと日本的宗教感情の接点
Points of contact between Islam and the Japanese
religious sentiment

- ① 二つの障害
Two obstacles
- ② 二つの接点
Two points of contact
- ③ 自然をイスラームはどう観るか
Nature in Islam
- ④ 自然を日本人はどう観るか
Nature in Japanese
- ⑤ 言葉と信仰
Words and belief
- ⑥ 再び教室にて
In the classroom , now.....

[おわり]

[イスラーム思想と日本]

平成3年11月9日 ISLAMIC CENTER-JAPAN

吉岡 俊輔

[I] はじめに

① 挨拶

* ここにありますようにイスラーム思想と日本という非常に大きい題目でお話をする形になりますが、私はべつにこの高いところからイスラームについて深遠高邁な説を立てるという気持ちもなければ、もとよりそんな能力もありません。ただ私が25年近くの教員生活で経験し、反省してみたことをここで御報告いたしたいと思う次第であります。ですからこれは、教室からの体験レポートであります。

② 25年間の教員生活からの感想

* 私は千葉県柏市にある気象大学校という気象庁の幹部職員を養成する学校の一教師であります。この気象大学校で歴史を教えております。歴史学という科目名で、実質的にはイスラームの歴史を学生達と一緒に勉強しております。この学校では必ずイスラームを教えることになっている訳ではなく、歴史一般を教えればいいのですが、私は25年近く必ずイスラームの歴史を学生達と一緒に勉強してまいりました。

* 毎年四月に新しい学生を迎えて、歴史の授業の最初の時間に、< では皆さん、今日から一年間イスラームについて皆さんがたと一緒に勉強いたしましょう！ >と挨拶すると、決まって彼等新入生は、< えっ！ イスラム教の授業をするんですか！ >と驚ろいたような顔をします。< べつにイスラームの布教をする訳ではない、ムスリムになれという訳でもなく、このとても重要な宗教についてこれがどんな教えであるか、どのような歴史を辿ってきたかを一緒に勉強するのは。 >と説明しても、学生達はウンザリしたような顔付をします。

* 学生達はイスラームが嫌いだからそのような反応を見せる訳ではありません。嫌いにも好きにも彼等のイスラームに関する知識は殆どゼロです。よく知っている方で、酒は駄目・豚肉は駄目・日に何回もメッカに向かつて礼拝しなければならない・四人妻程度のこと。イスラームは砂漠の向こうの奇妙な人達が熱烈に信じている、戒律の厳しい、日本人にとっては異質なものであると考えているようです。彼等はイスラームだけではなく、キリスト教や仏教にも同様に関心を示しません。(いわゆる新宗教といわれる、例えば<オーム真理教>や<幸福の科学>などマス・コミでよく取り上げられるものについては、彼等の友人間の話題の材料として、また現代的なファッションとして面白半分の興味は示す)。私の25年に及ぶ長い教員生活で、しみじみ感じたことは、日本の若者達の宗教に対する関心の無さであります。気象大学校の学生が特別なのではなく、彼等はごく平均的な日本の若者だと思えます。若者だけではなく我々大人も宗教への関心が薄いです。私の学校の同僚達を観察してそういえます。気象大学校の教員が特別なのではないでしょう。我々はごく平均的な日本の大人です。こうして結局しみじみ感じることは、総じて我々日本人の宗教への無関心ということなのです。

* この、日本人の無宗教については既に皆さんがた先刻御承知のことで、すぐあとでご紹介しますが統計にも出ていることでして、何も今さら私がくたぐたく殊更に言葉を重ねる必要はない訳です。ただ私は一教員として、講義をしていて学生達の反応に神経質になるという職業的な習性上このことを強く感じているのだと思えます。いっこうに興味を示そうとしない学生達、こちらが躍起となってますます熱を込めて話をすればするほどしらけたような雰囲気になる教室、講義が終わった後がっかりしてしょんぼりと自分の部屋に帰って行くときの惨めな気持ち。私の存在理由が問われているような気がして、いやが上にもそのことを痛感したのでしょう。

* この、無宗教である・ないし宗教に関心を持たないということは、しかし、もしそれが日本人の真の姿だとすれば、これははつきりと異常だといえるでしょう。御承知の様に、宗教とは人

間の生・死、他ならぬこの自分の生・死を貫く最も根本的な事柄に関わっているものです。このようなことに何の関心も払わずに平然として人間は生きて行けるものでしょうか。私は到底不可能だと思えます。人間である限り無宗教であるとか、宗教に何の関心もないとかいうことはあり得ないと思えます。

③ 宗教に関する統計の語るもの

* ここに面白い統計があります。少々古いですけど昭和56年(1981年)5月5日の朝日新聞に載ったアンケート結果です。その設問と答えをご紹介します。

(Q) 家の宗派は別として、いま、あなたが信仰している宗教がありますか。神道、仏教、キリスト教、それ以外の宗教に分けるとどの宗教に入るでしょうか。

(A) 仏教系	27%	神道系	4%
神仏両方	2%	キリスト教系	2%
それ以外の宗教	1%	信仰する宗教なし	62%
その他・答えない	2%		

(注) 信仰する宗教なしと答えた者が、30代までの若い層では70%以上、20代前半では実に80%であった。しかしこの率は歳をとるほど減って60代以上では30%台になる。十大都市、とくに首都圏に多い。

[それにしても、一応36%の人が信仰を持つとしていることになる訳ですが、これについてこのアンケートに携わった人は次の様に言っています。「文部省の統計数理研究所の行なった日本人の国民性調査によれば、信心・信仰を持っている人が大体30%であった。しかしその内の三分の一の人が日常生活で何の宗教的行事もしていないとのことだった。また最近ある機会があって、宗教欄記入のある個人カードを何枚か見たが、10人のうち実に9人までが信仰なしであった。こうしてみると、この朝日新聞のアンケートの、信仰を持つとした36%でも、漠然とした信心の人も含まれているような数字に思える」と。]

* さて、先ほど私が面白いといったのは、このアンケートにはつぎのような非常に重要な結果も出ているからです。即ち、上の62%もの多数を占めた信仰する宗教なしと答えた人達の50%以上

The Japanese mostly have no interest in

が、〈人間や自然を超えた大きな存在を感じるか〉という設問に対して、感じるという回答をしており、〈人間の魂は死後も残るか〉という設問にもやはりその50%以上の人々が、残るとの回答をしているのです。そしてまた、上の統計数理研究所の調査でも、信心・信仰なしとしている人々（大体70%）でも、そのうちの実に75%もの人達が宗教的な心は大切と答えているのです。

* このアンケート結果を私は非常に興味深く思います。ただ上にある設問で、〈人間や自然を超えた大きな存在を感じるか〉という設問の他に、例えば、〈自然のまっただ中で大きな存在を感じるか〉という設問があったとすればより興味深かったと思います。この設問に対しては、おそらく圧倒的な多数が感じると答えたことでしょう。それはさて置き上のアンケート結果ははつきりと次のことを示しています。即ち、日本人は総じて、既に出来ている既成の特定の宗教には信徒として属さない傾向があるが、宗教への関心そのものは強く持っているということです。日本人は無宗教だというのは、既成の宗教を持たないという意味においてです。日本人は宗教への関心を持たないというのは、既成の宗教への関心を持たないという意味においてです。先に述べたように、宗教への関心なくして人間は生きれるものではないでしょう。宗教への関心はありながら既成の宗教は信じない、これが我々日本人の姿であることが浮き彫りにされました。

〔Ⅱ〕 日本人の宗教的感情

① 既に日本人は独特の宗教的感情を持っている。

* ところで、宗教への関心を持ちながら宗教そのものは持たないということがあり得るのでしょうか。私はあり得ないと思います。私は、日本人は、それと自覚しないで、いわば無意識的に、既にれっきとした特定の宗教的感情を強固に持っているのだと思います。だからこそ、その宗教的感情に合わない他の既成の宗教を受け入れられないのではないのでしょうか。もしそのような感情を持っていなかったとしたら、すぐにでも既成の宗教を受け入れてしまっていたことでしょう。日本人がもう既に或る独特の強い

宗教的感情を持ってしまっているから、その感情を考慮しない他の既成宗教は日本人の中には割込めないのだと思います。つまり日本人固有の宗教的感情を今までの既成宗教はうまく汲み取れなかったのであります。或いは、既成宗教は布教に当たって日本人の宗教的感情をうまく掬い取っていないとも言えましょう。

- * ではその日本人固有の宗教的感情とはどんなものでしょうか。
- 1 <自然>への思い入れの強さ。
 - 2 悠久の大自然・大宇宙が人間を産み、育て、そして人間は死んだらその<自然>の懐へと帰って行く。
 - 3 人間の魂はその大自然の懐へ溶け去って行く。
 - 4 <自然>・大自然・大宇宙・天こそが永遠であって、人間の命は短く、結局そこから生まれそこに帰って行く。
 - 5 大自然との一体感を持つことが人間が到達すべき非常に高い境地だとされる。
 - 6 また人によっては、人間の魂は死後大自然の<大いなる魂>へ溶け去って行くと見る。
 - 7 大自然の大いなる魂・人間・自然の三者間にあいまいもことした連帯性が認められる。
 - 8 いずれにしても人間の死後の個性・個別性はあまり強く（或いは全く）要請されない。

以上が日本人の宗教的感情として挙げられると思います。このような感情を日本人は伝統的に心の底に、仮に漠然としたものであり、明確に自覚されていなくても強固に持っていると思われるのです。それが漠然としており、明確に自覚されていないだけに、かえって根強い根源的心情を形成しているようです。つまり自覚的にそのような宗教感情を選びとっている訳ではないから、異なったタイプの宗教感情に取り替えるということが極めて困難になるのです。

② 日本人の思考傾向

* こういう宗教的感情に付け加えて、総じて日本人の間では、真理は<言葉>によって言い尽くされるものではないという考え方が根強くある事が考慮されねばなりません。従って宗教上の真理も言葉の媒介によって獲得されるという見解に日本人は多かれ

少なかれ抵抗を感じます。

* 従って宗教の教義を言葉を連ねて論理的に検討し、推論して、結果としてその宗教を信ずるに至るということにあるうさんくささを感じます。これは何も日本人が論理的に弱いとか理論が苦手だということではない。日本人には、論理だけでは何か重要なものが漏れているような気がするのであります。

* だから結局のところ、論理的・理論的にはいつまでたっても得心できない訳で、信仰の告白は一か八か目をつぶって、「えいっ！ やけだ！ 信じてしまえ！」ということになりがちであります。

〔Ⅲ〕 イスラームと日本人の宗教的感情

* 真理を言外に求めようとするこの日本的傾向はイスラームの傾向とは合い入れないと思います。イスラームは（キリスト教も、又仏教さえも）本来＜言葉＞の宗教ですから。

* また上に述べたような日本的な宗教感覚は今さら言うまでもなくイスラームとは相反します。

* そうすると私は、真理は言葉によつては獲得されないと思ひ、かつあのような宗教観を無自覚的に抱いている学生達に、言葉に依つてイスラームを説いているという馬鹿馬鹿しいというか、ともあれ奇妙なことをやっていることになります。

* こんなことは無駄だから止めた方が良いとは思いません。そんなことを言ったらイスラームは日本人には無縁の教えになつてしまいます（私自身もイスラームを受け入れる前はこのような状態だった筈であります）。イスラームの普遍性からもそんな馬鹿なことはありません。もしこのような宗教感情に対してイスラームが無力なら、イスラームの＜普遍性＞に傷が付くではありませんか。普遍的な真理としてのイスラームと日本人の宗教的感情との無意識の対決が真面目に検討されるべきでしょう。イスラームは何か特殊な、砂漠の向こうの、日本人とは全く違う人々が信じている奇妙な宗教なのではなく、民族・国籍・文化の違いを超えて、普遍的な人間性に普遍的に関わる宗教なのですから。

* ところでその私自身にしたところで、今イスラームを受け入れているにしても、かつてそのような強固な日本的な宗教感覚を持っていたのであってみれば、現に信じているイスラームの教えを無意識にいわば日本風にねじ曲げて理解しているかも知れないのであります。これは私にとって非常な恐怖であります。

* この問題は今ここでは別のこととして先を急ぎ、歴史の授業を続けていってどうにかこうにか学生達がイスラームに興味を持つに至った経緯に移りたいと思います。

[IV] イスラームと日本的宗教感情の接点

① 二つの障害

* 先に日本人が既に持っている〈自然〉を重んじる強固な宗教感覚と、ややもすれば真理は言外にあるとする日本人の思考傾向の二つが、イスラームやキリスト教の既成宗教が日本に定着するのを妨げる障害になっていることを観ました。だが真実障害になっているのでしょうか。イスラームの〈普遍性〉はこれに対して無力なのでしょうか。イスラームの〈普遍性〉はこれに対してどのように対決していくのでしょうか。

② 二つの接点

* 上に述べた二つの障害についてしみじみ考えているとき、私は、これら二つは実は障害ではなくて、そのままイスラームと日本を結ぶ二つの接点なのではなかろかと思い始めました。イスラームと日本とに架かった二つの懸け橋ではないかと気づき始めました。

③ 自然をイスラームはどう観るか

* 世界的な大宗教のなかでイスラームは圧倒的に自然への視線が強いと思います。キリスト教とは較べものにならないくらい強いと言えます。このことは旧・新約聖書とクルアーンを読み較べてみればすぐ分かることです。クルアーンにはいたるところに自然についての記述があります。そして非常に重要なことは自然はアッラーのアーヤ（印）なのだという事です。

1 雲を動かし、積み重ね、雨を降らし、雹を作り...

(24章43節) @

- 2 天と地の中に、人間と動物の創造の中に、夜と昼の交替の中に、水が雨として降ってくることに、風向きが変わることの中に、アッラーの印が満ちている。

(45章3節以下)

- 3 人間は観ないか、ラクダが如何に造られたかを！空が如何に掲げられたかを！山々が如何に据えられたかを！大地が如何に延べられたかを！ (88章17～20節)

* クルアーンの中の自然についての記述は、自然はアッラーの印としてそれを凝視し、そして何かに気付くようにと呼びかけられているように思えます。

* 又これは非常に大切だと思いますが、クルアーンでは自然は全て(空を飛ぶ鳥や雷鳴も)アッラーをサッパハ(賛美)し、ものの影さえもアッラーにサジャダ(礼拝)していると考えられていることです。

1 鳥が羽を広げてアッラーを賛美するのは、24章41節。

2 雷がアッラーを賛美するのは、13章14(13)節。

3 ものの影がアッラーに礼拝するのは、13章16(15)節。

* 天と地の間の自然はことごとくアッラーを賛美したり、或いはアッラーに礼拝するという能動性を持っていると考えられています。これは恐ろしいぐらいすごい考え方です。

* 全て被造物の本質はアッラーを賛美し、アッラーに礼拝する事ではないのでしょうか。その本質的部分において、人間と自然とがいわば仲間として、友達として、仲良く、共にアッラーを賛美し礼拝をするのです。

④ 自然を日本人はどう観るか。

* 先に述べた日本人の強固な宗教感情に裏打ちされて、当然にも、日本人は自然への凝視が得意であります。ごく普通に身に付いているといっても良いでしょう。例えば、有名な松尾芭蕉(1644～1694)の俳句の中に、よく見ればなずな花咲く垣根かな (When I look carefully, I see the NAZUNA blooming, by the hedge!)というのがある。

* この俳句において、なずなは強い能動性を持っています。

単に芭蕉の観察の対象にとどまらないで、なずな自らの発する自発的な声が聞こえて来るようです。いわば、芭蕉はこの小さななずなを自分の仲間として、共に或る一つの場に参画しているのです。芭蕉は典型的な日本の詩人であります。この句に日本人の典型的な自然への凝視の形が込められているとって良いと思います。

* クルアーンの自然観と芭蕉の句に代表される日本人の自然観とは、ここから何かを導き出せそうな、互いに何かかみ合うようなものを持っているのではないかと私には思えるのです。

⑤ 言葉と信仰

* イスラームにおいて信仰とは、先ず第一に、< 私は神によって創造され、私の生は瞬間瞬間神によって支えられていることを認めること >でありましょう。人間が一瞬の途切れもなくアッラーによって生かされ続けているという事実に気付くこと、この喜ばしい事実に気付くこと、これがアッラーを信ずるということの第一歩だと思います。信仰とは、イスラームに於いては、何か或る不合理な神秘めかしいことを、目をつぶって「えいっ！」とばかりに無理やり認めるといようなことを指すのではなく、人間の本来の在り方に気付くこと、人間はその存在をアッラーによって無条件に肯定されているという喜ばしい事実を受け入れる事であります。この、人間が神によって創造され、そしてその後一瞬の途切れもなく神によって生かされ続けているという事実に気付くことをムハンマドは感謝すると呼びました。つまり感謝が信仰でした。この喜ばしい事実に気付く時、思わず叫び出したくなる。それがタスビーハ（賛美）なのだと思います。

* この気付きは何か長々しい論証の結果、長々しく論理と推論を組み立てた結果生じるものではないと思います。それが何より証拠には、クルアーンに於いては実に単純な身辺のごくありふれた自然に凝視を当てて単純簡明に、さあ気付け！と呼びかけられているではありませんか。アッラーのアーヤ（印）はいたるところのすぐ側の自然にあると言われているではありませんか。

* 気付いた後の壮大なイスラーム神学の建設は、言葉によって、長々しい論証と論理と推論を組み立てて行なわれはしますが、

信仰への第一歩は単純簡明な気付きにあると思います。まさにこの点に、この気付くという方法論に日本人にとってのとっかかりが出来ると思われるのであります。つまり、自然をかくあらしめている神の恵みへの賛嘆、人間・動物・植物・天体などを通じてその底に流れている脈々とした一つの恵み、力、意志への賛嘆、それとかかる恵みへの感謝即ち人間がその恵みの上にも見たたされた存在であることに気付くこと、そして礼拝即ちそのような恵みに気付いて、その自覚に基づいて生を営むように努力すること、これは我々日本人にとって異質なことではないのであります。

⑥ 再び教室にて

* 学生達とイスラームを一緒に勉強していく際、私は教室で彼等と次のようなことを話し合いました。即ち、「私達日本人の特質（自然と言葉）を先ずはつきりと自覚し、意識に留めておく事が大切なのだ。そしてその特質はいつけんイスラームの精神と相反するよう見えても、むしろそれを掘り下げてみれば、かえってまっすぐにイスラーム理解に向かう道になっているのだと言えるのではないか」。「我々日本人にとってイスラームは何ら異質ではないのだ。それは言葉を換えて言えば、イスラームの普遍性は日本的感性・思考を特殊な、異質なものとしなないという事なのだ。言ってみれば、我々日本人を含めて、人間はみなムスリムとして生まれて来たのであって、ただそれに気が付いていないだけなのだ、と言えるぐらいにイスラームの教えには普遍性があるのではなかろうか」。「イスラームでは神と人間の関係は何者の媒介を経ることなく全く直接であるとされる。イエスを媒介とするキリスト教とはこの点で異なっている。イスラームの普遍性の要因の一つは、この神と人間との間に何者をも介在させないという点にあるのではないか」などなど。

* こうして私達の小さな学校の小さな教室でのイスラームの勉強は自然と言葉に焦点を当てて、学生達も私も興味をその都度新たにされつつ、続けられております。

[おわり]